九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

今日的地域活動をとおした成人男性の家事分担状況の変容 ： 生活史の実証的分析をとおして

志田, 倫子
九州大学大学院 ： 博士後期課程3年

https://doi.org/10.15017/1012

出版情報：飛梅論集. 1, pp.37-50, 2001-07-25. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学コース院生論文集，2001，創刊号，37－50頁
Bull Education Cource, kyushu U , 2001, Vol 1, pp37－50

今日的地域活動をとおした成人男性の家事分担状況の変容

－生活史の実証的分析をとおして－

志　田　倫　子*

1. 問題の所在

本稿は、男性の「家庭」における家事分担状況の変容と今日的「地域活動」への参加との関連性について実証的に考察することを目的とする。

近年「女性の社会進出」がめざましい勢いで達成された。しかしその結果、女性の「社会」における進出は定着してきたが、「家庭」における家事・育児の負担は依然として女性の肩にかかっており、2重の負担を担っていること（利谷　1998）が現代社会の問題点として浮き彫りになっている。そしてこの問題を解決するために、「男性」が「家庭」における家事・育児に協力することが1つの解決策であると考えられる[1]。そこで近年、これまで「家庭」における家事に協力的でなかった男性が、その意識と行動を変容させ家事分担を担っていくためには何が必要であるのかの解明が求められている。

社会的な背景に目を向けると、戦後、日本国憲法のもとで男女同権が提唱されて以来、さまざまな男女平等を推進する動きがみられている。その動きとは、一方では行政施策に基づき社会の各分野において環境整備がなされることによって推進され、もう一方では国民の主体的な働きかけによってなされてきた。その中でも、80年代に世界的なうねりの中で達成された「女性」の社会への進出は、画期的な変化である。そして現在、これらの女性を取り巻く環境の整備が迫られている。今日では、それを受けて行政主導で「男女共同参画社会基本法[2]」が制定され、国民の間でもさまざまな自主的な取組みがなされている。この中で、「地域活動への参加」は同基本法の柱として設定され、推進されている[3]。しかし、このように「地域社会」への主体的な参加は推進されても、参加主体の意識・行動にいかなる変化をもたらすのかは明らかにされていない。

以上の諸点をふまえて、本研究では「男女共同参画社会」を意識して設立された地域活動が、参加主体にとって「変動の激しい社会状況や、急速な進展を遂げる技術革新の中で、情報に関して再学習する」（浜口他　1976　41頁　下線引用者）成人の社会化エージェンシーとして作用しているのかを考察する。そして参加の結果、男性の家事分担状況に影響をもたらしているのかを実証的に考察する。

*九州大学大学院博士後期課程３年

具体的には次の方法によって目的の解明を試みる。本稿では、活動への参加者に対する活動の過程を考察するだけでなく、主体の行為に影響をもたらす広範囲の生活史に目を向ける。この方法によって、同じ活動を行っていながら家庭生活において意識・行動変容をおこす人、おこさない人がいるのは何故か、その原因が解明できる。そして、「何が」要因となって家事分担状況に違いがでるのかを明確にする。その結果にもとづいて、同活動がいかに参加者に影響をもたらし、家事分担の変容に結びつくのかを考察する。

なお、ここで対象とする「地域活動」についての説明を加えたい。同活動は、「仕事」中心の「男性」が「地域」へも生活領域を広げることを「男女共同参画社会の一形態」として捉えている。即ち、本活動は決して「男性が家事を分担すること」を目的としているわけではなく、「地域活動を男性が主体的に行う」ことを趣旨としている[4]ものである。言い換えると、本活動への参加は、国民の一般的、今日的な動向の一つとして捉えることができる。

2. 調査概要

(1) 調査対象地の特徴

本研究では、対象とする地域活動として「じゃおクラブ[5]」(神奈川県在住の40才以上の男性であることを会員の原則として組織されている地域活動団体。1991年7月に設立され、現在100名余からなる)を取り上げ[6]、実証的考察を試みる。本活動の特徴として次の2点を指摘することができる。

まず第1点として、上述したように「男性も仕事だけでなく、地域へ参画していくこと」を趣旨とした活動である。したがって、女性の手を借りずに男性主体で活動が運営されているところに特徴がある。

第2点目の特徴は、本活動を設立するにあたって、「生活クラブ生協[7]」の活動を参考にしていることである。生活クラブ生協・神奈川の理事によって「男性主体の地域活動」の設立が提案されて、設立に至っている。従って、本活動は生活クラブ生協・神奈川の組合員を妻にもつ夫によって設立されている。

(2) 調査方法

まず、同活動の会員に対して、アンケート調査[8]による全数調査を行い、その結果をもとに次の人を対象者として選択した。

本研究では、同活動から受ける影響力を考察する必要がある。そこでまず、他の地域活動・社会活動に参加してきた場合は、参加者は他の活動による影響も受けているために、こういったケースを排除し、「同活動が初めての地域活動[9]」である人を対象とした。さらに、「一定以上同活動に参加している人」を選択した。

さらに、変容過程の考察であるために、「同活動に参加する前には、家庭における家事分担を行

っていなかった」人を選択した。その結果から、以上の条件を充たしている21人に対して1998年3月に半構造化面接[10]を行った。主な質問項目は、入会前の生活・家庭における夫婦関係、入会動機、活動状況、活動後の生活全般・家庭内の家事分担を基本とし、それらと関連付けて多くの質問を行った。

その結果に対して、次の3分類を試みた。家庭における家事分担状況が大きく変化するケース、やや変化するケース、変化しないケースである。本稿では、これらの3分類の中から代表的な事例を取り上げ、その変容過程を分析する。

3. 分析の枠組み

(1) 経歴分析

本研究では、生活史の分析の視点として、「成人の社会化過程」を成人個人の側から明らかにするために有効な方法としてこれまで採り入れられてきた、成人の経歴分析を用いる。

その理由として、成人社会化の顕著な特色の1つは、成人期前における予期的社会化とは対照的に「回顧的社会化」とでもいうべき傾向が眺められる点にあるからである。

すなわち、未来に向けて自己の確立をはかるという志向性をもつよりも、ライフ・サイクルのそれぞれの時点において、「自らの過去を振り返り、来し方の人生を自分なりに評価し意義づけるとともに、新しく意味づけられた自己の存在理由に基づいて、今後演ずべき社会的役割をフィード・バック的に再規定する」(浜口他　前掲書　40 - 41頁　下線引用者) ことが行われている。

このような「自己再規定」によって、「上位システムたる全体社会ないし所属集団に対して、そのサブ・システムとしての各成人が、保有するある程度の自立性に基づいて、いかなる機能的貢献をなしうるか」(浜口他　前掲書　41頁　下線引用者) が決定される。

(2) 経歴分析における注目事項

さらに、浜口他 (1976) が指摘するように、経歴分析を行う際に、次の3点に注目する。

①卒業就職・転勤転職・結婚といった「経歴上の転機」に注目する。さらに「対人コンフリクト」の有無に注目し、起きた場合にはどのように解決したのか、という点。

②社会体系の期待と要請を代弁する、当人にとっての「影響を与える人物との出会い」に注目し、その影響力を考慮する。

③当人の社会的経歴を方向づけ、あるいは規制する、人間観・対人関係観の如き、基礎的価値意識の内容。これを本人の支持するイデオロギーとして捉える。

これらの3点を探ることによって、成人成員が、上位システムからの要請と期待を、それぞれの経歴上の転機においてどのように受け止め、同時に、その転機における地位＝役割の再取得を通じて、上位システムに対する機能的貢献をいかに意識したかを、明確化することができる (浜口他　前掲書　42 - 43頁)。

さらに、「自己再規定」を行う過程には、ギデンズ（Giddens,A. 1990=1993）が人間行為の特徴として指摘しているように「自らの過去を振り返り、反省する」という「再帰的」見直しが行われ、「その上で今後演ずべき社会的役割を決定する」という2段階の考察を行う。

(3) 主体の解釈

さらに、インタビューの結果、主体があえて取り上げた事項は、生活史の中で「主体が取り上げた」という点で意味があるものとして理解する。従って、その主体があえて取り上げた事項に対する分析にあたって、その状況を、「どのような」経験のなかの古いものと関連づけて、「どのように」（新しいものとして）理解しているのかに注目して分析する。このようにして、主体がその新しく直面し、注目した状況をいかに「解釈（interpretation)」して未来につなげているのかを考察する（Berger,P.L.1981=1987 29頁)。

4. 事例分析

以下、3人の生活史を記述し、上記の分析枠組みに基づき分析を試みる。

(1)

[事例1] A氏

65歳。現在、妻と26歳の娘と3人暮らしをしている。大手の電器メーカーに勤めていたが現在は定年退職をしている。他には36歳の長男、31歳の次男がいるが、2人とも結婚後独立し、それぞれの子どももいる。同活動には平成3年に入会した。

① 仕事中心の生活

【生活史】

48才の時、当時中学生だった次男が登校拒否になった。その頃、自分は単身赴任をしていて自宅を離れていた。妻は生活クラブ生協の活動で忙しく、家にいることが少なかった。

その頃はずっと父親としての居場所が無いと感じていた。それは、家に帰っても妻が活動で忙しく、自分は取り残されたような状態だった。このような家庭環境の中で、次男は登校拒否になったと思われる。この時、妻の活動に対してまず、苛立ちを感じた。それと同時に、妻に家庭のことをまかせっきりで、自分が会社人間であったことにも原因があるだろう。しかし、自分自身は、この時、会社人間で次男に対して何もしてあげられなかった。また、妻の活動に対しては、苛立ちと同時に、そんなに生き生きしている生活クラブ生協の活動とは、どんなことをしているのか、と興味をもった。

【分析】

このようにA氏は、家庭において「次男の登校拒否」という〈対人コンフリクト〉[11]に直面し、「自分の属する社会体系」としての「家族」を見直すという事態に陥る。その時に、「属する社会体

系」のうち「会社」に自分のほとんどの力がつぎ込まれているために、「家庭」においては非力であることを実感するとともに、この事実を悲観している。

さらに、自分の見えない場所にある妻の「属する社会体系」である「地域活動」（生活クラブの活動）に対する興味を見い出している。しかし、この時点では現状を変えることはできず、自分のこの気持ちを心に刻み付けるに留まる。

② 定年前／活動の設立

【生活史】

女性ばかり目立つ地域活動に対する「やっかみ」と「危機感」を持っていたときに、「男性」に注目した生協からの誘いがあった。生活クラブ生協・神奈川の理事長の呼びかけで、89年から91年にかけて「じゃおクラブ」設立のための準備に携わる。A氏の他には商社、新聞社、マスコミ、市役所に勤めている人などが準備に携わった。その準備の中で、「活性社会プロジェクト」を作り、さらに「じゃおクラブ」の旗揚げとなる。その後、「名刺のいらない付き合い」を目標として、「定例サロンと研究部会など」の活動枠組みが決まる。この期間、年齢的には58～60才であるが、仕事は定年前の嘱託の状態で、週に2～3回行くだけであった為に、職場から地域社会に生活の基盤を自然と移行することができた。

【分析】

この時期「定年」という「経歴上の転機」を前にして、「仕事中心」の生活が終わりを告げることになる。従ってこの時点で、「自らの過去を振り返り、来し方の人生を自分なりに評価し意義づけるとともに、新しく意味づけられた自己の存在理由に基づいて、今後演ずべき社会的役割をフィード・バック的に再規定する」（浜口他　前掲書　40-41頁）必要性が生まれる。その過程は次のようになされている。

(再帰的見直し)

まず「過去の出来事を再帰的に見直す」作業が必要となる。A氏の場合、定年前に感じた属する社会体系のうち「家庭」において自分が非力であることを悟りその事実を悲観したこと、さらに、自分の見えない場所にある妻の属する社会体系である「地域」活動（生活クラブの活動）に対して興味をもった経験を見直す。

(影響を与える人物との出会い)

ここで、「生協理事長」との出会いがおきる。そして、男性の地域活動団体を設立する準備を行わないかという誘いを受ける。この出会いは、A氏にとっての（影響を与える人物）との出会いと指摘できる。この事実と、前述した再帰的見直しの結果おきた「地域活動」に対する興味と合わさって、男性の地域活動団体の設立へと動き出すことを決意する。

(今後演ずべき社会的役割の再規定)

ここで、今後これら「家庭」と「地域」という2つの「上位システム」に対して機能的貢献を果たすことを、今後自分が演ずべき社会的役割として再規定することになる。

③ 地域活動開始以降

【生活史】

活動をしていくうちに、活動内容に、仕事の役得を生かすことが求められるようになった。例えば、講演会やイベントの仕掛けの際には自分たちで考えて自分たちでセッティングしなければならないし、会場整備や、ギャラの交渉、客集めも自分たちでしなければならないからである。また、イベントでは、椅子を出したりお茶を出したりも自分たちでしなければならない。また、生ゴミの仕分けなども行っている。この段階で、人生とは十人十色ではなく一人十色である、つまり会社だけでなく、地域・家庭など十ぐらいの分野が必要であるとの認識を持つようになった。

（家庭生活においても）自分の息子夫婦をみていると、奥さんが子どものおむつを換えたりしているときは、夫（自分の息子）が、さっと食後の皿を洗ったりしている。これをみると、30代、40代は性別役割分業から、共業へ移行した最初の世代であると実感する。今では、家庭内の家事を妻と娘と自分で、きっちり3等分して行うようになった。

【分析】

A氏は「役員」であるため、活動に主体的に関わっていく立場にある。その中で、自らがお茶出しや椅子出しといった「雑用」をこなしていく。この経験は、「性別役割分業の変容」を実際に経験することになり、結果として主に女性がやるものと認識していた考え方を変容させていくことになる。同時に、「生ゴミの仕分け」といった家事に必要な知識を「学習」する。

さらに家庭生活においては、息子夫婦のやり取りを見るだけでなく、それにあえて「注目」し、それを「解釈する」という過程を経ている。すなわち、これまでの経緯を経た結果、そのやり取りを、「性別役割分業に捕らわれない地位－役割の関係性のお手本として」解釈し、学習することになる。

上述したように、「地域活動を行うこと」を決意したときには、「家庭」と「地域」という2つの「上位システム」に対して機能的貢献を果たすことを、今後自分が演ずべき社会的役割として再規定した。そして、その後の活動・生活過程は、「どのように」これらの上位システムに対して機能的貢献を果たしていくのかを決定していくプロセスとなる。

以上、A氏の場合、定年前に経験した家庭における〈対人コンフリクト〉が大きな要因となり「定年」を迎えた時に「地域」「家庭」に対する再帰的見直しが行われることになる。その後、（影響を与える人物）との出会いを経て、「今後演ずべき社会的役割をフィードバック的に再規定」するに至った。そして、再規定された社会的役割にもとづいて行動を行う。その中でさまざまな経験に直面し、その現象をさらに解釈し取り入れていくことにより、男女の関係性を捉え直し、自らの方向性を決定していった。このようにして「地域」「家庭」といった定年後の上位システムに対して行っていく機能的貢献を再確認しながら、自らの立場を確立していった。

しかし一方で、活動前にこのような「深刻な」〈対人コンフリクト〉に直面しなかった場合もあ

る。このタイプを[事例2]として取り上げたい。

(2)

[事例2]　B氏

61歳。現在夫婦2人暮らし。成人した子どもがいるが既に独立している。大手民間企業の調査部門に勤務していたが、定年退職し、現在は大学で非常勤講師を行っている。同活動には、平成3年に同活動に入会した。

① 仕事中心の生活

【生活史】

会社中心の生活を送るのは当然のことと思っていた。家に帰れば、疲れをとって寝るだけの日々だった。このような中、妻の変化がみられる。最初に変化を感じたのは20数年前、すなわち自分が30代後半の時である。妻が生活クラブの活動を行うと言い出した。これに対して、「エネルギーは外で放出すべきだ」と思った為、いいことではないかと思った。しかしその結果、外から電話が繋がらない、物資で玄関がいっぱいになる、といった状態が起きた。このとき同じような状態に陥った夫達で、(被害のあった亭主達が集まる)「亭被連」といったものを作った。

次に、生き生きと活動する妻たちを、嫉妬交じりに見るようになった時期がある。自分たちが企業の中で感じない何かを妻たちは感じているらしい、ということはわかった。

【分析】

妻が活動を始めた時期は、これまで「会社」中心の生活を送っていて「家庭」に目をむけることはなかったのに対して、妻の行動を通して、自分の属する社会体系である「家庭」を意識した時期としてとらえることができる。これは、一種の家庭における〈対人コンフリクト〉といえるが、さほど強力なものではないといえる。

さらに時期をおくと、妻の行動から「地域活動」(生活クラブ生協の活動) に対する興味が湧いている。ここで、さらに「地域」に対しても興味をもった時期として確認できる。

② 活動の設立

【生活史】

このような折り、「生活クラブ生協・神奈川」の理事長が「男性も地域に活動の場を持たないか」という提案をし、その話を妻から持ち掛けられる。「これからは、男性も地域活動をするべきだ」という思いも抱いていたため、この話を受け設立のために動くことになる。

【分析】

この時点で、B氏は「自らの過去を振り返り、今後演ずべき社会的役割をフィード・バック的に再規定」するという行為を行う。その過程は次の様になされている。

(影響を与える人物との出会い)

B氏にとっての転機は、「生活クラブ生協の理事」の持ち掛けを受けた時点におきる。この理事の発案がきっかけとなり、結果として、これまでの「仕事」を「上位システム」とした生活から「地域」をも視野に入れ、自分の生活構造の中に取り入れていくことを考える。従って、この理事との出会いは、B氏にとって（影響を与える人物との出会い）といえる。

(再帰的見直し)

次に、理事の話を妻から持ち掛けられた時点で「再帰的見直し」が行われる。すなわち、「妻は、何故、地域活動をそんなに生き生きと行っていたのか」という気持ちを抱いた自分の過去の経験を再帰的に見直すことになる。この結果、理事の問いかけに対して「自分もやってみよう」という結論を出すことになる。

(本人の支持するイデオロギーの影響)

さらに「再帰的見直し」が行われ、「自分もやってみよう」と結論づける際に、最近の社会の動向をうけて「男性も地域活動をする時代だ」というB氏のもっている基礎的な価値意識が影響していることがわかる。

以上の過程を経て、「仕事」を上位システムとしていた生活から「地域」をもそれに加えることを決定し、これらの上位システムに対して機能的貢献を果たすことを、今後演ずべき社会的役割として再規定する。こうして、「じゃおクラブ」の設立へのために動くことになる。

③ 地域活動開始以降

【生活史】

実際に活動を始めてみると、妻との会話が増えるようになった。「生活クラブ」、「じゃおクラブ」は共通の話題である。妻の活動とは、「地域社会」というキーワードで共通している。さらに活動を行うことによって、家事に対する妻の大変さが分かるようになった。今では家庭においても、妻の方が負担が多いが、家事の役割分担を行っている。

【分析】

B氏の場合、妻が行っていた「地域活動」に自分も参加することによって、「妻」への理解が深まったことを指摘している。

その理解の過程は、自らの活動をとおして「何故妻は生き生きしていたのか」という理由を解釈していく過程とも言い換えられる。本活動は「模倣型」活動であるために、活動をとおしてこれまで妻が行ってきた活動内容を大体なぞっていく経験をする。特に役員であるB氏は、立場上、活動に主体的に携わることが求められているために、このような経験を多く積むことになる。その活動のさまざまな場面において、「何故妻は生き生きしていたのか」という理由を「解釈」していくことになる。

また、「妻との共通の経験」が「妻との会話」に繋がっている。さらに、活動の中でこれまで女性（妻）がしてきたことを実際に行う中で、「家事に携わる妻の大変さが分かるようになった」といっている。これらの「妻への理解」が、「妻に対する協力体制」へとつながっていく。その結果、

「妻の方が負担が多いが、役割分担している」という「家庭」内での立場へと繋がっていく。

このように、B氏の場合（影響を与える人物）との出会い、再帰的見直し、本人の支持するイデオロギーが要因となって、「仕事」に加えて「地域」へ生活領域を拡大し、これらを上位システムにし、これらに対して機能的貢献を行うことを決定する。

一方「家庭」に関しては、「仕事」中心の生活を送っているときに弱い‹対人コンフリクト›が行われているが、決定的なものではない。従って、活動を行う時点では「地域」を上位システムとして再既定はしているが「家庭」はそれに含めていない。

しかし活動を行っていく中で、過去の家庭における「対人コンフリクト」の解明がなされ、それによって「家庭」に対する見直しが行われている。このようにして、B氏は「家庭」も自らの上位システムとして再既定していくことになる。

ここでA氏とB氏を比較してみたい。B氏の場合、「家庭」における〈対人コンフリクト〉はA氏ほど深刻なものではない。従って、家庭生活に対する「再帰的見直し」が行われたときに、家庭を自らの上位システムとして位置づけるまでは至っていない。その後、活動経験が「妻に対する理解」へと結びつき、それが、結果として、家事の一部を分担する行動へと結びついているが、A氏のように「家庭内の家事を等分して分担する」という変化には至っていない。以上の点から、A氏はB氏に比べて、活動前に家庭において強度の〈対人コンフリクト〉が行われており、それが家事分担の変容状況に関係していることがわかる。

(3)

[事例3]　C氏

63歳。現在の家族構成は、自分たち夫婦と既婚の子ども夫婦と孫の3世代家族。定年前は大手の民間企業に勤務していたが、現在は自営業を営んでいる。平成7年に同活動に入会した。

① 仕事中心の生活

【生活史】

定年前の日々を思い出してみると、会社一辺倒の働きばちであったといえる。そして、そのような毎日に疑問をもつこともなかった。妻は、結婚・出産を期に退職し、その後はずっと専業主婦でいる。

【分析】

C氏の場合、定年を迎えるまで「会社」中心の生活を送ることに対する疑問を抱かされるような出来事に遭遇しなかった。従って、当然のように「会社」を自らの上位システムとして位置づけている。

② 定年／活動への勧誘

【生活史】

しかし、定年を迎えた時、大きく変化した。それまで働きばちだった自分を支えていたのは組織や会社である。その中に「自分」がいた。しかし、定年を迎えると何も無くなってしまった。「自分」が生きて行くためにはどうしたらいいのだろうか。人間は一人では生きられない。そこで、地域の中で自分の可能性を築いていきたいと思った。

このような時に、学生時代の友人が、「じゃおクラブ」に入っており、入会を勧められた。さらに、活動内容にも興味をもち、これからの時代は「男性も地域の一員として地域活動に参加する必要がある」というイデオロギーにも共感がもてた。これまでは、「勉強会」[12]を中心に参加していたが、「地域じゃお」が立ち上げられて、湘南地区の「じゃお湘南」の役員となった。

家庭生活では、「じゃおクラブ」の活動をするようになって、妻との会話が増え、さらに家事に携わる妻の大変さが分かるようになった。しかし、夫婦の間での「家事」は、ほとんど妻がしている。

【分析】

「定年」を迎えるとき、「会社」を上位システムとした生活を今後送ることができないことを悟る。そこで初めて、「今後演ずるべき社会的役割」を探す必要に迫られる。そこで、「自らの過去を振り返り、来し方の人生を自分なりに評価し意義づけるとともに、新しく意味付けられた自己の存在理由に基づいて、今後演ずべき社会的役割をフィードバック的に再規定する」必要に直面する。

従って、これまでの生活はそれなりに満足するものであったと「自らの過去を振り返り」これからは違う生活を選ぶしかないと「来し方の人生を自分なりに評価し意義づける」作業が行われる。

(影響を与える人物との出会い)

そして「今後演ずべき社会的役割の再規定」の思案を行っている時に、友人から「じゃおクラブ」の参加を勧められる。これがC氏にとっての（影響を与える人物）となる。これまでC氏の中で行われた「再帰的見直し」の結果、今後は「会社」以外の生活領域が必要であるという結論がでていた。その時に、この「出会い」があり、今後「地域」を上位システムとして、「今後演ずべき社会的役割」を探していく可能性が呈示される。

(本人の支持するイデオロギーの影響)

この時に、これからの時代は「男性も地域の一員として地域活動に参加する必要がある」という社会的動向にもとづく自らのイデオロギーも加わり、「地域社会」を上位システムとして、その中で機能的貢献を行っていくことを、今後の「演ずべき社会的役割」として再規定することになる。

一方、「家庭生活」に目を向けてみたい。本活動は、活動の中でこれまで性別役割分業の結果、女性が担ってきたことを自らが行う機会に恵まれる。従ってC氏も、活動過程とともに「家族」生活の変化として、「家事に携わる妻の大変さがわかるようになった」ことを指摘している。さらに、活動をとおして「妻との会話が増えた」ことも指摘している。しかし、その実態が「家庭における家事分担」へとは繋がっていない。

その理由として、C氏の場合、「定年」という「経歴上の転機」を迎えて、自らの過去を振り返っているが、その際に自らの過去を否定的には捉えていない点にあると指摘できる。

すなわち、生活領域ごとに検討していくと、定年前は「仕事」中心の生活を送り、「家庭」では夫としての地位―役割をこなすという生活を行っていた。その生活の中で、「仕事」の部分が欠落したために、その部分を「地域」によって補ったことになる。従って、「家庭」の部分はこれまでどおりの生活で、行動変容をおこす必要がない。

このC氏のように、活動を行う前に「家庭」における〈対人コンフリクト〉が無い場合は、これらの活動経験によって「学習」する内容を、「家庭」において実践し、性別役割状況を変えていくという行動面での変化にはつながっていかないことが指摘できる。

5. まとめ

[事例1]～[事例3]までの比較検討によって、今日的地域活動によって家庭における役割分業状況が変容する要因として、参加者が「地域」へ生活領域を広げるという「経歴上の転機」を迎える以前に経験した、「家庭」における〈対人コンフリクト〉の強度が関係していることを実証的に明らかにした。

具体的には、活動前の〈対人コンフリクト〉の強弱によって、活動後に主体が何を「上位システム」として捉えるようになるのか、さらに、その結果どのように目を向ける環境が違い、その環境をいかに解釈するするようになるのかが変わってくるために、それによって「家庭」における役割分担に違いがでてくることがわかった。

以上、男性の「家庭」における家事分担状況の変容と今日的「地域活動」への参加との関連性について、実証的に考察してきた。なお、本稿の成果を踏まえ、今後、男女共同参画社会を目指すさまざまな動向に目をむけ、主体の意識・行動変容過程を考察することを今後の課題としたい。

[注]

（１）同活動の参加者のもたらす、家庭における家事分担の変容過程のほかに、職場生活、家庭生活全般の変化などについての考察は、志田（1999）でなされている。また、現代社会において、女性の家事に対する負担が重いこと関しては（利谷　1998）などによって指摘されている。

（２）「男女共同参画社会」という言葉は、1991年に初めて使用され1999年に「男女共同参画社会基本法」として制定された。本基本法は、社会における仕組みを変えていくことを意図すると同時に、国民の意識啓発を促すものとしての意味をもつ。従って、この言葉が使われるようになって以来、国民の意識に訴えている。

その意味に目を向けると「男も女も主体的かつ平等に意思決定のできる社会関係を創り出

すこと」である。しかし、これまで女性政策で用いられてきた「女性の社会参画」はその目標が明確であったのに対して、この「男女共同参画社会」における「男性」の立場は如何様にも捉えられる。その中で、本研究で対象とした地域活動団体が目標に掲げたような、「これまで女性が手足となって行われてきた地域活動に男性も主体的に取り組もう」という動きは国民の一般的な解釈であるといえる。

（3）男女共同参画社会基本法の中で、その実現を目指すための具体的な方法として社会活動への参加が柱として据えられている。同基本法の成立、施行に前後して、県・市町村レベルの各地方自治体において行動計画がたてられたが、いずれの自治体もその中心的な施策の柱として、意識改革、就業の促進、社会的活動、福祉活動などを強調している点はほぼ共通している。本研究で取り上げる活動は、厳密にいうと地域社会を基盤にして行われた社会活動とみなすことができ、この施策の柱に則っている。

（4）これまで、地域活動において男性が「役員」などを担うのに対して、女性が「手足となって実質的な活動を行う」という性別役割分担が行われていることが指摘されてきた。

（5）団体名「じゃおクラブ」、同団体は80年代に主婦が中心となって大きな展開をみせた社会的活動、生活クラブ・神奈川の組合員の妻をもつ夫達が設立したもの。構成員の基本属性は、ホワイトカラーサラリーマンか、現在は定年退職しているが、以前はそうであったひとが中心。妻は専業主婦が中心である。年齢は61～65歳が最も多く、51～55歳がそれに続く。現在の活動内容を簡単に見てみると、大きくわけて4つのタイプの活動から構成されている。その内容は以下のとおりである。①受動的に参加できる「勉強会」②テーマ別に主体的に参加できる「各種研究会活動（環境研究会、高齢者研究会など）」③神奈川県内の地区別活動「地域じゃお（じゃお湘南、じゃお県央等）」④各種サークル活動。

（6）同活動を調査対象地として取り上げた理由として、次の諸点があげられる。

第一に、同活動が「男女共同参画社会」を意識した先駆けてきな活動であり、注目に値したこと。

第二に、男性主体で活動がなされており、本研究の趣旨と一致したこと。

第三に、全国の中で先駆け的な男性の活動は幾つかみられたが、調査を開始した97年当時、100名程度の会員を擁し、組織的に行われていた活動は、同団体だけであったこと。

（7）生活クラブ生協とは「地域のなかで、地域の実生活に根差した真に大衆的な大衆運動をなんとかして作り出そう」という意図のもと、1965年に牛乳の共同購入からスタートしたグループ。1980年代には組合員の主婦を生活クラブの代理人として候補にたて、統一地方選挙において数多く当選させている。その他の特徴的な活動として、「反核キャンペーン平和運動」「合成洗剤追放運動」「リサイクル運動」「農業シンポジウム」などがあり、「生活者の視点」を重視した活動を行っている。活動内容は、「じゃおクラブ」の活動と共通するテーマが含まれる。

（8）アンケート調査は1997年10月に実施。91名（全数調査を希望したが、会費だけを払って全

く参加しない“会費会員”を除いた91名を団体側から指定された）の会員に対して郵送調査を行い、有効回収数70部（76.9%）に基づいて分析を行った。

半構造化面接は、1998年3月に実施した。

（９）町内会活動は、ジェンダーに関する価値変容には結びつかないことが確認されているため（志田　1999）、町内会活動の参加者はこのなかに含まれている。

(10) A氏、B氏、C氏の現在の家事分担状況は、インタビュー調査だけでなく、1997年10月に実施したアンケート調査に基づく、客観的指標によっても把握されている。アンケート調査では、詳細な家事内容を20項目列挙し、現在それぞれの家事労働に対して自分がどの程度行っているか5段階で丸をつけてもらった。その結果に基づき、筆者が「1ほとんど妻がする～7ほとんど夫がする」までの7段階の家事分担状況に分類した。

その結果によっても、A氏は「4　平等に家事分担している」　B氏は「3　妻のほうが負担が多いが役割分担している」　C氏は「1　ほとんど妻が家事をおこなっている」という結果がでている。

(11) A氏の意識した〈対人コンフリクト〉が実際に大きなものであったかを、さらに裏付けるために、A氏の妻に対して、その当時のことについてのインタビューを試みた。その結果、その当時の家族が非常に重苦しい雰囲気に包まれていたことが確認できた。従って、A氏の感じた〈対人コンフリクト〉の大きさを確認することができた。

(12)「これからの男性の在り方」といった、ジェンダーをテーマにしたものもあるが、そればかりではない。具体的には、各研究会に関連した内容であることが多い

[主要参考文献]

・Anthony　Giddens（松尾精文他訳）1990=1993『近代とはいかなる時代か？－モダニティの帰結－』　而立書房

・Anthony　Giddens（松尾精文他訳）1992＝1995『親密性の変容－近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム－』　而立書房

・志田　倫子　1999　「男女共同参画社会と地域活動の新展開」東京女子大学紀要『経済と社会』第27号　p71～78

・利谷信義　1988　「男女共同参画社会の意義」　都市問題研究会『都市問題研究』

・浜口　恵俊他　1976　「日本人における成人社会化の基本特性－社会的経歴の分析を通して－」日本教育社会学会編　『教育社会学研究　第31集』　p40－53

・P.L.Berger, H.Kellner（森下伸也訳）1981＝1987『社会学再考－方法としての解釈－』新曜社

・矢澤澄子編　1993『都市と女性の社会学－性役割の揺らぎを超えて－』サイエンス社

The Change of House Work Share of Adult Men through a Today's Community Work :

From an Analysis of Life History

SHIDA Michiko

This writing considers the process that men who participate in the community work constructed under the fundamental law takes the housework share and this also aims to seek for a guide to realize the gender-equal society.

Under the same law, the change of the relationship between man and woman as to each life space is demanded. Especially man's domestic housework sharing comes to be an important problem. So one of the policies is a participation in the community work. From the research until now, I have found that some have changed the domestic housework share affected by the activity, others have understood the necessity of change but can't carry it out.

I thought that there would be other factor than the activity. So I extended the role of analysis to the life history including the activity process primly by participation, and I tried to specify the factor that changed the role structure. As a method, first I sent out questionnaires and interviewed to those who participated to the activity then I analyzed the socialization process with these results and a career analysis.

As a characteristic of men who take housework, I have solved that before they participate in the community work, they conflict with their family at home. It would be possible to contribute to the progresses of the politic in the future.